校長室だより～燦燦～ №５７６

組合せ

2022.6.28

今日は、福島県中学校体育大会の組合せ抽選会の日である。中体連県大会の組合せが決まる日である。各地区大会を勝ち抜き、県大会に出場する学校の顧問の先生方は、ドキドキであろう。気が気でない方もいるだろう。私には、その気持ちがよくわかる。

今まで何度も組合せを見てきた。その度ごとに、いろいろなことを思った。「組合せがわるい」「これはいいぞ」好き勝手なことを考えるものである。選手としての自分の試合の組合せ、部活動の顧問としての組合せ、息子の試合の組合せ、娘の試合の組合せ、トータルでどのくらいの数になるだろうか。

ソフトテニスの組合せは、自分もそのことに携わっていたのでわかるが、ある決まりごとに基づいて作られている。全くのフリー抽選の大会など、滅多にない。前の大会の結果、今までの大会のポイント制、地区大会の結果など、何かしらの根拠に基づいている。

だが、組合せに満足する人は少ない。何かしらの不満をもつのが常である。「ここに入っていれば」「何でこんなところなんだ」「ここのブロックは薄い」次から次へと自分本位なことを考える。例え第１シードになったとしても、当たりたくない相手が同じブロックにいたりすると嫌なものである。

何年も見てきて思うことがある。予想通りの結果に終わる大会などない。第１シードから第４シードまでが、そのまま勝ち上がり、準決勝を戦う大会は多くはない。必ずと言っていいほど、「えっ」という波乱がある。結論は出ている。それは、勝負というものはやってみないとわからないということである。

「勝ちに不思議の勝ちあり。負けに不思議の負けなし」プロ野球の野村克也監督の言葉である。真実だと思う。勝ってしまったという試合がある。だが、負けるときは、負けるべくして負けている。どんなに経験を重ねても、負けるときには同じ失敗をしているものである。だから、勝負は難しい。

ソフトテニスでは、テニスコートの神様がいるのだが、いまだに、どうやったら微笑んでもらえるのかわからない。かといって、気まぐれな神様だとも思えない。修業が足りなかったということであろうか。

中体連県大会の組合せは何度も見てきた。負ければ終わりのトーナメント戦である。決勝までいくつもりが、３回戦で負けたことがある。逆に、１試合、１試合、先のことはあまり考えずに戦っていたら優勝してしまったこともある。不思議の勝ちだった気がする。ライバル校が負けていき、最後に残ったのが我がチームだった。神様が味方してくれたのだろうか。

７月２３日（土）・２４日（日）が県大会である。組合せが決まっても、どんなドラマが待っているのかは誰にもわからない。今年は、また違った立場で中学生の躍動する姿を見たい。